

惣津律士論

伊藤俊一郎

天、大任を下さんとするや、先ず加うるに大いなる試練をもってしといったような言葉がある。彼が役人第一歩から踏ませられた途は緬羊のそれである。周知の通り緬羊は、馬と並んで唯二つだけ、過去のわが国の国防というものへ直接のつながりを持たされた家畜であった。しかも馬産の華麗さに較べて之は又、あまりにも地味に取扱われた家畜であった。大久保利通卿の企図に始まる明治初年の奨励以来、幾度か失敗に失敗を重ね、あやうく「吾が国には不適」の烙印を押されかけつつも、軍の要請という圧力の下に、それとあらわな表現は避けながら、増殖に腐心しなければならない家畜でもあった。

むしろ不幸とさえ言えるだろう。農林省在職の全期間を通じての彼は、この家畜のとりこにさせられ切った。ともすれば消えかける火に長年に亘りいろいろと手を変え品をかえて油を注ぎ風を送る。之はまことに容易ならざることであり、之は亦実に異常な耐忍を必要とすることでもあった。そしてこの苦悩に充ちた幾歳月かが、彼の性格の中へ不撓不屈というものと、飾らざる真情の流露という二つのものを深く刻み込んで仕舞ったのかも知れない。

苦悩はこれだけにとどまらない。彼はシンガポールで敗戦を迎え、そして又其の技術者としての揺籃の地月寒種畜牧場廃絶の苦杯を自らの手でとらされた。そのいずれもが思いもよらざる他動に因る。

これ程迄の試練になお、生き延び得たということになれば、大方の凡庸人と雖も流石に手の1つ、足の1本位は非凡化せざるを得ないであろう。彼の場合に於ておやは、今日にして言えることではある。

唯彼に幸したであろうことは、其の担当の職務の故に若くして幾度か海の外に出て、わが国を、わが国の農業を、そして又わが国の畜産を直視もし批判もする機会に恵まれ、よって自らの識見を次々と嵩め得たこ

とであろう。

昭和24年を転機とした岡山県畜産課長への転進は、蛟竜の雲を得たるにも似て、押えに押えていた「満」をサッと放つの機縁になった。彼の透徹した感覚と快刀乱麻の判断と、高潮の寄せるにも似た行動力が、何をこの県の畜産に結果したかを語るべくは、私の筆舌は適切ではない。唯思う。畜産課長の全期間に亘り彼は、おそらくは不撓不屈の気力と、真情の流露そのものであっただろうと。

今俄に彼は畜産という名の奉仕の途から蟬脱した。貿易の自由化と称する嵐の中で、更に熱風を送られるであろう坩堝の中の畜産というものを、岡の上に腰をかけて、冷かにも又静かに凝視し得る機会を得たことは、より大いなる開眼の機縁に恵まれたものとして、自他共に一先ずは慶祝しなければなるまい。

彼にとってはめくら藪みみたいな分野に入っては、それが唯一つの身上、活きた科学眼を新たな仕事に植えて見よう位の決心だろうが、それが成功しようと失敗しようといずれでもよし、唯加療を祈るのみである。